



標本（蝶）

京都師範学校旧蔵

古いタイプの標本箱で、側面には「京都師範学校」のラベルが付されています。その中にアゲハチョウ科とタテハチョウ科、ジャノメチョウ科のチョウが17種18個体収められています。触角が脱落している個体もありますが、いずれも破損や退色が少なく、良い状態のまま保存されています。

標本のいくつかには手書きの標本ラベルが付されていて、戦前の1935年から戦後の1957年にかけて京都市近郊で採集されたことが読み取れます。当時の京都市近郊には、豊かな里山自然の景観が残っていました。そのような身近な自然を活用した生物教育が、戦前から戦後にかけて展開されていたことがわかります。

また、それぞれの標本の隣には、種名が一目で分かるような大きな手書きのラベルが貼り付けられ、標本箱正面には「京学大構内で見られる蝶」と記したラベルが貼られています。「京学大」は本学の前身である京都学芸大学のことで、1949年に開設され、1957年には市街化の進んだ京都市北区のキャンパス（現在の附属京都小中学校）から、里山に面した現藤森キャンパスへと移転しました。もしかするとこの標本箱は、新キャンパスで見られる種を、師範学校時代の標本の中から選び出してまとめた教材なのかもしれません。

戦後の高度経済成長とともに、キャンパス周辺の里山景観は住宅地へと置き換わりました。キャンパス内には多くの緑が維持されており、近年の調査では少なくとも32種のチョウが生息していることが確認されています。しかしながら生息している種は変化し、標本箱の17種のうち9種が見られなくなりました。特に開けた草原で生活する種（ヒメアカタテハ、ウラギンヒョウモン、ジャノメチョウの3種）は、すべて見られなくなりました。一方、現在でも見られる8種は、すべて樹林地とその周辺で生活するチョウです。このような生息種の変化は景観の変化、例えば、キャンパス内に植栽された樹木が大きく成長し、樹林が形成されたこととも関連していると考えられます。

自然科学の理論は近年飛躍的に発展し、それに応じて理科の学習内容も複雑化、体系化されています。そのような現代であればことさらに、科学を実物から学ぶこと、科学を実物から学ぶ姿勢を身につけることの重要性が高まっています。毎年初夏の実習授業では、理科教員を目指す本学学生が、構内のチョウを探して採集し、種を同定し、標本を作成しています。また、綺麗にできた標本については、3Dモデル化してICT教材として発信するなど、現代的教育課題に応じた活動も行っています。戦前から受け継がれてきた自然の中での学びを継承、発展させ、将来世代へと受け継いでいきたいと考えています。

執筆者：今井健介（理学科教授）